

2019年3月9日、舞根九々鳴浜、舞根湾口、湾内ガラモ場、および湾奥にて潜水調査を行った。操船は畠山信さん。天気は晴れ。水温は表面・海底とも6~7℃。透明度は水深10m付近までは8~10mあったが、これより深いところではやや茶色の濁りがあり透明度4m前後であった。水温が低いため魚は種類・数とも少ないが、無脊椎動物は多く、マナマコやトゲクリガニなどを主に狙った漁業が盛んに行われていた。

#### 湾外九々鳴浜沖

魚はハオコゼ（写真1）とリュウグウハゼのみ見た。マナマコは約1000m<sup>2</sup>の調査範囲内に35個体いて、サイズレンジは全長11~25cm。沖合ではナマコの潜水漁が行われ、岸近くには刺し網が仕掛けられていた（写真2）。浅場には海藻が繁茂し、ヨツハモガニなどの甲殻類やクシクラゲなどが見られた（写真3, 4）。

#### 湾口

ハオコゼ、リュウグウハゼ、およびコモンフグが見られた。エゾアワビは2個体確認。マナマコは調査範囲内に43個体いて、サイズレンジは全長10~28cm。

#### 湾内ガラモ場

キヌバリ、ニクハゼ、コモンフグを記録。マナマコは23個体いて、全長15~30cm。刺し網が仕掛けられており、トゲクリガニを狙ったものとのことだ。

#### 湾奥

ニクハゼが多数いる（写真12）。サビハゼとスジハゼを1個体ずつ記録。マナマコは17個体いて、サイズはかなり大きく22~32cm。

#### 考察

畠山信さんによれば、ナマコ漁は2、3年休漁していたあと、解禁となったとのこと。数も増えサイズも大きくなっている。湾外は比較的小さい個体が多く、湾内は大型個体が多いようだ。稚ナマコは浅所に加入し成長に伴い深い所や沖合に移動する、というマナマコの一般的な生活史と矛盾する。サイズ選択的な漁獲圧が関係した可能性もあるが、湾内では牡蠣養殖に由来するマガキの偽糞がマナマコの餌となり成長を促進している可能性もある。マナマコを入れたカゴを湾の内外に設置するなどの実験してみるのもおもしろいかもしれない。



写真 1 ハオコゼ. 春の繁殖期には雄がなわばりを持つ. 眉間のしわの寄り具合から, 雄と思われる.



写真 2 ヨツハモガニ. 水中では海藻の上で何か摂餌している風に見えたが, 写真では, はさみでつかまえているのは, 同種の小さい個体にも見える. 共食い?



写真 3 立派な刺し網がしかけられていた. 高さがあり, 濁りの強い環境ならかなり見にくいだらう. 時々不自然に動いていたことから, どこかに魚がかかっていたと思われる.



写真 4 「牡蠣の木」 荒天等で樹木が海底に没し, そこに牡蠣が付着して成長する. 木材はキクイムシなどに食べられるため, 牡蠣の基質は徐々に朽ちる. 周囲には雑多な海藻が繁茂している.



写真 5 1cmほどのクシクラゲの接写を試みたところ, その左に数百マイクロンサイズのコペポータが写っていた.

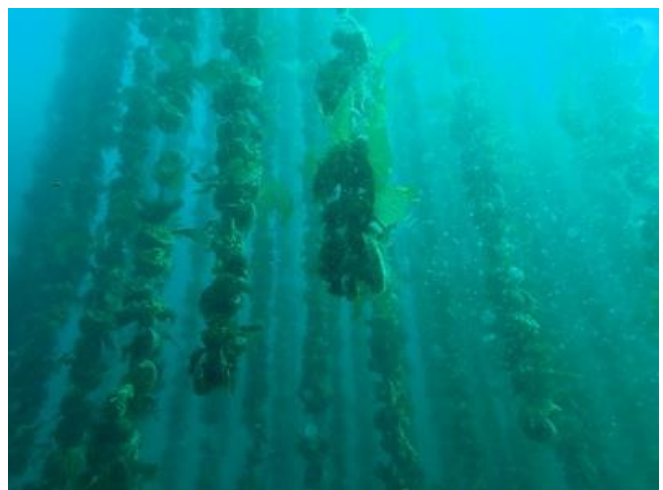


写真 6 垂下養殖されているホタテガイ. 海がこれだけ透明だと餌が不足するのではないかと思ったが, 信さんによれば, 良く成長しているとのこと.





写真7 人生で最大級のマヒトデ。59cm あった。



写真8 調査開始当初からここに沈んでいる台所のシンクと鍋類。アルミが腐食してきた。8年前にここで起きたことについて考えさせられる。



写真9 棘立ちの良いマナマコ。



写真10 コモンフグ。いつも後ろ姿ばかり撮影してしまうため、今日は泳いで追い回したあと、水中ノートで追い込んで横から撮ってみた。寒い中を泳がされたフグはへろへろになっていた。

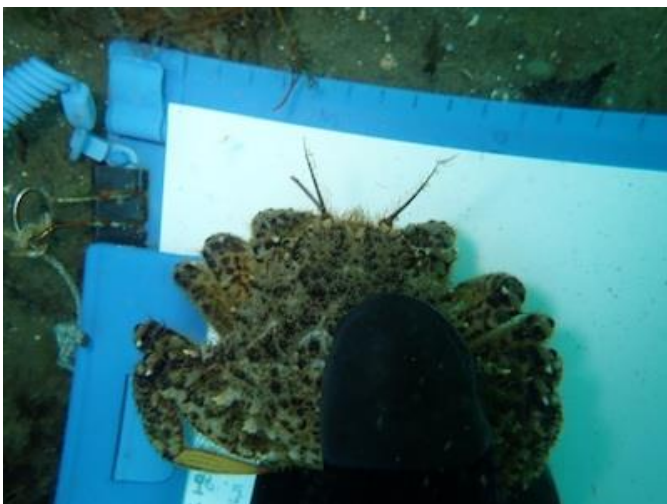


写真11 トゲクリガニの目視体長確認中。信さんによると、気仙沼では「毛ガニ(小)」として売られることもあるそうだ。



写真12 多数いたニクハゼ。隠れ家になる穴にも不自由はしなさそうだった。